

# INTERVIEW

自治医科大学地域医療学センター  
公衆衛生学部門 教授  
阿江竜介先生



## 「世界のJICHI」という想いを 実現させるために。

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

### 高齢者を元気にする研究

山田隆司(聞き手) 今日は自治医科大学地域医療学センター公衆衛生学部門の教授に就任された阿江竜介先生をお訪ねしました。これまでもご活躍は拝見していましたが、自治医大出身の自治医大教授ということで、われわれとしては学内に力強い友人が増えたようで、期待を大きくしているところです。

阿江竜介 ありがとうございます。

山田 まず読者の皆さんにこれまでの経歴を簡単にお話いただければと思います。

阿江 私は中学生の時から医師になりたいと思っていました。それで入学したのが自治医大だったわけですが、自治医大があったからこそ、今の

自分があると確信しています。自治医大で一番良かったのは、義務年限です。義務年限中に地域医療を実践したことで、今の自分があります。これから私が成すべき事は、自治医大への恩返しだと思っています。

山田 先生のご出身はどこですか。

阿江 兵庫県加東市です。卒後の2年間は県立淡路病院で初期研修をし、その後は但馬牛で有名な県北部に位置する但馬地域の出石病院(現 豊岡病院出石医療センター)に赴任しました。ここは50床規模の病院で、高齢者を主体に診療していました。当時の但馬地域はすでに高齢化率が30%を超えていました。基幹病院から「お看取

りをお願いします」という高齢患者がたくさん紹介されてきました。このような方々を何とか元気にできないかと思い、看護師チームと話をしていたら、全員「高齢患者の口が汚い」ということに気がつきました。そこで着目したのが口腔ケアです。適切な口腔ケアを実施すると、高齢者がみるみる元気になっていくのです。お看取り目的で転院してきた多くの高齢者が復活して退院していかれました。このような経験から、看護師チームを連れて口腔ケアのセミナーに行ったり、但馬地域の高齢者施設に「一緒にや

りましょう」と口腔ケアの指導・啓発をしに行ったりしました。まるでセールスマンのように。

そんな中で「元気さ」という標準的なスケールを作成することができれば、医療や介護の現場で役に立つのではないかと考えました。そこで、学術研究の必要性を認識しました。ところが私は卒後、研究をまったくやったことがありませんでしたので、そのやり方をイチから学び直すために、後期研修で自治医大に戻ることにしました。

## 大学に戻って研究を学ぶ

山田 最初の出石病院には何年いたのですか。

阿江 4年です。7年目から自治医大に戻って2年間後期研修をしました。

山田 後期研修では主に何を勉強したのですか。

阿江 総合診療です。総合診療をベースにしながらかで研修していると、自分がこれまでに地域でやっていたことがいかに手前味噌だったか思い知りました。これと同時に、研究のお作法も学ぶことができました。

山田 先ほど言われた「元気さのスケール」のような、研究の手法を学びたいという気持ちがあったわけですね。後期研修の後はどうしたのですか。

阿江 兵庫県に戻り、今度は県北部の鳥取との県境にある公立浜坂病院に赴任しました。そこでも「元気さ」の研究を続けました。当時、但馬地域にあるすべての高齢者施設(20施設)の皆さまに協力してもらい「GENKI研究」と名付けた研究を実施することができました。協力してくださっ

た施設の皆さまには心から感謝しています。学術論文の執筆を試みましたが、1年では足りないと思いました。そのころはちょうど義務年限が終わる9年目でしたが、兵庫県庁と相談し、浜坂病院での勤務をもう1年延長してもらいました。

山田 そこには2年間いたのですか。

阿江 はい、2年です。その後は自治医大に恩返しがしたいという気持ちが強くなり、大学に戻ることを決意しました。

山田 それで地域医療学センターに戻ったのですかね。

阿江 はい。地域医療学センター公衆衛生学部門を選びました。公衆衛生学を選んだ理由は、「医療だけでなく社会の問題に取り組める」と思ったからです。

山田 義務年限後も1年間、地域に残り、その後は大学の公衆衛生学に在籍して地域医療に関する